

小学校外国語活動充実に向けたカリキュラム開発について

—地域や児童の実態を生かした教材づくり—

土江 和世

Kazuyo Tsuchie

奈良教育大学大学院教育学研究科教職開発専攻

School of Professional Development in Education, Nara University of Education

1.はじめに

小学校学習指導要領改訂（2008年3月28日公示）で、小学校における外国語活動の必修化が決定し、2011年度より5、6年生で年間35時間実施されることになった。その円滑な実施に向け、文部科学省は共通教材として『英語ノート』を作成し、移行期間からの使用をすすめた。しかし、ベネッセによる「小学校英語・拠点校の取り組みに関する調査」の結果にも表れているように、『英語ノート』には、「難易度」「評価の方法」「使いやすさ」などで課題があることがわかった。また、『英語ノート指導資料』をもとに各レッスンの指導内容、表現、目標などを一覧表にまとめたところ、指導内容と目標とが区別されていないことがわかった。

本研究では、充実した小学校外国語教育を進める際に考慮しなければならない観点や注意点などを考察し、『英語ノート』に代わる、地域や児童の実態を生かした教材及びカリキュラムの開発を試みる。

2. 小学校における外国語教育の現状

小学校の英語教育導入の契機となったのが、1996年の中央教育審議会の第一次答申である。第二章「国際化と教育」では、その目的の中に、「国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意志を表現できる基礎的な力の育成」が挙げられている。

2002年学習指導要領の改訂により「総合的な学習の時間」が導入され、その中で国際理解教育の一環として、小学校でも英語教育が取り入れられるようになった。文部科学省の発表によれば、2002年度の時点で全国の56.1%の公立小学校が

「総合的な学習の時間」で英語活動を実施していたが、2007年度には、何らかの形で英語活動を実施している学校の割合が97.1%に達している。しかし、学校や地域によって活動内容や授業時間数には相当のばらつきがあり、同じ中学校に進学する小学校間でも指導方法や内容が異なり、中学校の英語教育現場における問題の一つとなっている。

そこで、中央教育審議会における審議を経て、2008年度の小学校学習指導要領改訂で、小学校における外国語活動の必修化が図られ、2011年度より5、6年生で年間35時間実施されることになった。

3. 新学習指導要領「小学校外国語活動」について

カリキュラム開発をするにあたっては、まず新学習指導要領の内容等を確認しておかなければならないと考える。

小学校外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」である。

内容〔第5学年及び第6学年〕は、「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、(1)外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。(2)積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。(3)言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。の事項について指導する」とされている。また、「日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、(1)外国語の音声

やりズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。(2)日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。(3)異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。の事項について指導する」としている。

指導計画の作成と内容の取扱いに当たっては、「(1)外国語活動においては、英語を取り扱うことを原則とすること。(2)各学校においては、児童や地域の実態に応じて、学年ごとの目標を適切に定め、2 学年間を通して外国語活動の目標の実現を図るようにすること。(3)言語や文化については体験的な理解を図ることとし、指導内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になつたりしないようにすること。(4)指導内容や活動については、児童の興味・関心にあったものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること。」などを挙げている。

各学年の指導に当たっての配慮事項としては、「第5学年における活動」で「友達とのかかわりを大切にしたい体験的なコミュニケーション活動を行うようにすること」、「第6学年における活動」では「友達とのかかわりを大切にしながら、児童の日常生活や学校生活に加え、国際理解にかかわる交流等を含んだ体験的なコミュニケーション活動を行うようにすること」が示されている。

4. 『英語ノート』及び『英語ノート指導資料』の問題点について

文部科学省は外国語活動の共通教材として、移行期間からの使用のために、『英語ノート』を作成した。『英語ノート』は検定教科書ではなく、法的な使用義務はない。また、語彙や表現、シラバスは中学校の教科書との直接的な連携はなく、学校の実態に合わせて活用したり、使えるところを使ったり、配列を変えて使うといった方法も認められている(金森(2009)参照)。

『英語ノート』1,2には、それぞれ9つの単元があり、その多くは4時間の単元構成になっている。登場する語彙数は文部科学省によれば1が130語、2が150語であるが、これらは定着をねらったものではない。

一旦は、共通教材として使用されることが決定していたが、2009年11月、『英語ノート』が政府行政刷新会議の事業仕分けの対象となり、「廃止」とされた。しかし、小学校の英語教育改革総合プランのうちの『英語ノート』は小学校の外国語活動を進める上で必要不可欠との意見が多く寄せられ、2010度において2011年度使用分を作成・配布することとしつつ、2010年度中にウェブ利用などの意見も踏まえた見直しが図られることとなった。

以下に『英語ノート』及び『英語ノート指導資料』の具体的な問題点について述べることにする。

4.1. 「小学校英語・拠点校」へのアンケート調査の結果

ベネッセコーポレーションによる「小学校英語・拠点校の取り組みに関する調査」(2008)(H19年度指定校533校中275校からのアンケート調査への英語担当者による回答)によれば、『英語ノート』に関する全体的な感想は「よい(とても+まあ)」との肯定的な回答が66.5%を占めた。一方で、その活用についての項目では「難易度がちょうどよい」「評価の方法がしやすい」「使いやすい」などで、否定的な回答が過半数を占めている(図1)。

実際に内容を見ると、単元によって難易度にばらつきが見られ、高学年の知的レベルに合わないと思われる事柄やゲームが主体であるという印象を受ける。

また、90%以上の学校が、小学校の英語活動を通じて、子どもたちに「積極的にコミュニケーションをとろうとする態度」を身につけさせたいと考えている。これに対して、『英語ノート』を活用してそれが実現できるかという問いに対して「そう思う(とても+まあ)」と回答した学校は約半数であった(図2)。

『英語ノート』の内容を見ると、各自がタスクを早く終わることを競う個人ゲームや、ペアのうち、一方が早くできた方を勝ちとするような活動が多い。また、教師からの問いかけや課題が全体に向けられ、グループの中で協力的に課題を解決するような活動はほとんどないので、コミュニケーション能力は育ちにくいと思われる。

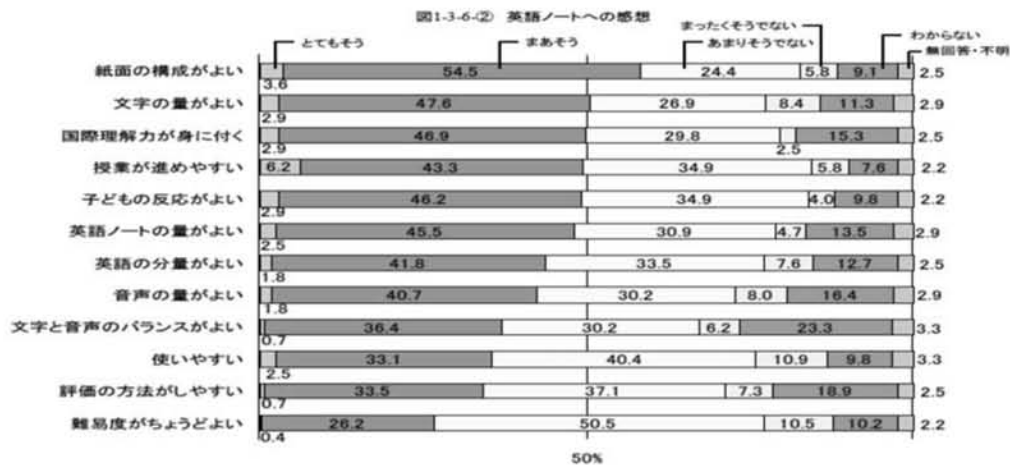


図1 『英語ノート』の感想

Q: 小学校での英語活動を通じて子どもたちに特にどんな力をつけたいと思いますか。(〇は1つ)

図3-2-1-① 英語活動を通じて子どもたちにつけたい力



Q: 「英語ノート」を活用することで前問のような力を子どもたちが身につけられる授業ができると思いますか。(〇は1つ)

図3-2-1-② 英語ノートでつけたい力が身につくか

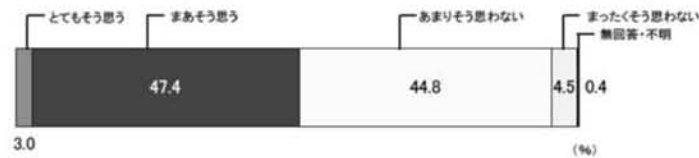


図2 英語活動を通じて子ども達につけたい力

4.2 『英語ノート指導資料』に関する問題

『英語ノート』の指導資料をもとに、レッスンごとの指導内容、表現、目標などを一覧表(表1)にまとめてみたところ、それぞれの指導内容と目標とが区別されていないことがわかった。本来、目標は、子どもにどんな力をつけたいかということであり、「何ができるようになっていれば目標に達したと言えるか」という「評価規準」を伴うも

のである。さらに、「何を評価するか」を考えることで、「どんな内容を指導するか」も見えてくる。学習内容は目標を達成させるためのものとして捉えるが、『英語ノート』では、活動内容自体が目標になっていることがわかる。

そのため、授業の発展が乏しくなりがちであり、アンケート調査で指摘された「使いやすい」や「評価の方法」などの課題要因の一つになっていると考えられる。

表1* 『英語ノート』1年間指導計画（『英語ノート』指導資料より）
*文部科学省『英語ノート』指導資料（2009）の内容を抜粋して筆者がまとめたもの

| lesson | タイトル | 指導内容 | 表現 | 目標 | 国際理解 |
|--------|----------------|---------------------------------|-------------------|-------------------------------------|---|
| 1 | 世界の「こんにちは」を知ろう | 世界には様々な挨拶があることを知る。 | What's your name? | 世界には様々な挨拶があることを知る。 | 文化の違いによるボディ・ランゲージやジェスチャー |
| | | 挨拶のマナーを知り、積極的に挨拶し、自分の名前を言う。 | My name is Ken. | 挨拶のマナーを知り、積極的に挨拶し、自分の名前を言う。 | |
| | | 友だちと挨拶し、作成した名刺を交換する。 | Nice to meet you. | 友だちと挨拶し、作成した名刺を交換する。 | |
| 2 | ジェスチャーをしよう | 様々な感情や様子を表す語を知り、そのジェスチャーをする。 | How are you? | 様々な感情や様子を表す語を知り、そのジェスチャーをしようとする。 | 世界には自分の思いを相手に伝えるためのいろいろなジェスチャーがあることを知る。 |
| | | ジェスチャーの大切さを知り、ジェスチャーを交えて思いを伝える。 | I'm happy. | ジェスチャーの大切さを知り、ジェスチャーを交えて思いを伝えようとする。 | |
| | | | | | |

4.3. 国際理解教育の内容について

「国際理解教育」の目標は①平和な人間の育成、②人権意識の涵養、③自国認識と国民的自覚の涵養、④他国・他民族・他文化の理解の増進、⑤国際的相互依存関係と世界の共通重要課題の認識に基づく世界連帯意識の形成、⑥国際協調・国際協力への実践的態度の養成などである。（大津和子 溝上泰(2005)）

町田(2009)は、子どもの「生きる力」を育む鍵は国際理解教育であるとし、『英語ノート』には、子どもの「生きる力」を育むという学習指導要領の理念がもっと反映されるべきだと指摘している。

実際に『英語ノート指導資料』は、ほとんど「国際理解教育」については触れていない。『英語ノート』1には「文化の違いによるボディ・ランゲージやジェスチャー」と示されているものの「国際理解」に関する内容が乏しいことが分かる。よって、上記のような本来の目標に到達するものではないと言えよう。

5. 小学校外国語活動充実に向けたカリキュラム開発

5.1. 「地域や児童の実態に応じる」観点から

学習指導要領では、指導計画の作成に当たって、上記のように、「地域や児童の実態に応じる」観点を示している。

坂本（2008）は、英語必修化に対する学校現場の不安や、研究開発校や英語特区の指定を受けた

学校がある一方で、英語活動をする時間が年間3時間くらいという小学校もあるという学校間格差の問題について述べている。そして、各小学校現場の子どもたちのニーズというものがきちんと把握されたくて、学ぶ主体である子どもを中心に考えたカリキュラムを創ることを提案し、「態度形成に向けての学習過程は、教師が願いとして大切に思う価値や、『ねらい』と知識・技能・姿勢の相互関係と、目の前の子どもの実態とをもとに構想した学びの課程である」としている。さらに坂本は、必要性だけではなく、「世界に一つしかない学級の子どもたちに合った、手作りのカリキュラムを創る喜び、楽しさを味わうことができるのは、自ら実践している人の特権なのです。」とも述べている。

外国語活動を生き生きとしたものにするためには、学校のこれまでの実践を踏まえ、地域や子どもの実態に応じたカリキュラムを作成することにより、充実した外国語活動の実現に向かうことが大切であると考え。地域や学校の特色を生かした取り組みを進めることが求められている。

5.2. 「コミュニケーションの質を高める」観点から

金森(2009)は、小学校における「国際理解教育の一環としての英語教育」では、外国語、外国文化のスキルや知識の獲得だけでなく、コミュニケーション能力を育てるための活動を通して、「自尊

心」を育て、同時に「他者尊重」の心を育むことも大切であるとしている。そのための英語活動とは、英語を媒体とした「楽しい」コミュニケーション活動であり、人と触れ合う体験を持つことであり、自己表現の機会を持つことであるとしている。

また、三浦、弘山、中嶋ら(2002)は、子どもにとって意味ある英語学習とは自己実現・自己高揚の欲求を満たすものでなければならず、「人を生かす」英語教育、「人と人を結ぶ」英語教育を目指すことが大切だとしている。

さらに、吉川(2002)は、文化の伝承、共有、創造を媒介するのが言語であるとし、人と人が結びつくためにコミュニケーション能力が大切であり、国際理解教育において、英語などによる異文化間コミュニケーション能力の育成が行われるべきだとしている。

カリキュラムを開発する際には、ゲームなどによる関わり合いだけでなく、外国語活動を通して子どもたちが自尊感情を高め、他者理解ができるような質の高いコミュニケーションの内容を授業に盛り込む工夫をしていく必要があると考える。

5.3. 「教科横断的な指導」の観点から

学習指導要領では、指導計画の作成に当たって、先に示したように、「教科横断的な指導」を活用することにより指導の効果を高めるようにすることとしている。

金森(2009)は合科的・教科横断的な指導の視点から、児童が持っている知識や体験、他教科や他領域で学んだ知識や異文化の知識を英語の学習に関連させることが、さらなる動機付けにつながるとしている。

児童の実態を捉え、他教科で学習した知識や体験とうまく関連させながらカリキュラムを作成す

ることにより、外国語活動の指導の効果を高めていくことが必要であると考えます。

5.4. 「文化理解」の観点から

新学習指導要領に示されている「外国語活動を通して、外国語や外国の文化のみならず、国語や我が国の文化についても併せて理解を深めるようにすること」は、国際理解教育の中でも「文化理解」の意味合いが強いと考える。よって、地域の特色や児童の実態を生かしたカリキュラムの開発をする際には、外国の文化とともに自国や地域に伝わるや文化を理解し、尊重しようとする「文化理解」の観点を重視することとする。

6. 評価について

学習者一人ひとりの習熟度を知るためだけではなく、指導そのものを省察し、指導計画、年間カリキュラムの改善のためには評価をする必要がある。それらのための評価を以下の通り適宜行う。

教える側より

- ・授業中の教師の観察
- ・活動で使用したワークシートや活動風景の記録(写真、ビデオ、作成物)などのポートフォリオ
- ・授業に関するデータを基にして、アクション・リサーチ的に授業改善をする。

学ぶ側より

- ・子ども自身が授業を振り返って評価する「自己評価表」(振り返りシート)→評価項目で、その時間にどのようなことを学んだかを確認させる。
- ・友だちと互いに評価し合う「相互評価表」

外国語活動において、授業の目標を達成できたかどうかを下の表2のような「評価の観点と評価基準」をもとに測ることとする。

表2 外国語活動における、評価の観点と評価規準

| 学習活動 観点 | コミュニケーション活動 | | 国際交流活動 (文化理解) | 言語・文化についての 知識・理解を促す活動 |
|--------------------------------|--|------------------------------------|---|------------------------------------|
| | 受信・理解 聞く(読む) | 発信・表現 話す(書く) | | |
| 関心・意欲・態度の 育成 | 英語表現を用いたコミュニケーション活動等に積極的に参加し、相手の意図する内容を理解できるように発話をしっかり聞こうとしたり、自分の意図する内容を伝える工夫をしたりしようとする。 | | 他国や自国の言語や文化を尊重し、興味や関心を持って積極的に活動に取り組もうとする。 | 言語や文化に関する知識に興味や関心を持って、活動に取り組もうとする。 |
| 英語でコミュニケーションを図るための 基礎的な力の育成 | 簡単な英語を用いたコミュニケーション活動:「聞く」を行うことができる | 簡単な英語を用いたコミュニケーション活動:「話す」を行うことができる | | |

| | | | | |
|-------------------------|---|--|--|---|
| 言語や文化について知識を得る・理解する力の育成 | | | | 外国語やほかの国の文化に関しての知識を得て、理解している。母語との違いや共通性に気づき、言語への関心の高まりにつながっている。 |
| 社会性の育成 | 友だちと関わりながら活動を行うことができる。ペアやグループの活動において、お互いを認め合い、相手を尊重し、協力しながら積極的に活動をする。 | | | |

7. カリキュラム開発（試案）

以上のような観点（「地域や児童の実態を生かした」「コミュニケーションの内容」「教科横断的な指導」「文化理解」「英語ノートとの関連」）で5年生、6年生の年間35時間分の年間カリキュラム

開発を試みた（表3）。

今後は、教材などを作成しつつ、実践を通して改善を図っていきたい。勤務校においては、指導に関わって研究授業をし、校内・校外の教科指導に関するメンターリングをしていく予定である。

表3 小学校外国語活動充実に向けたカリキュラム開発（試案より一部抜粋）6年生用

| 月 | テーマ | 言語材料 | | コミュニケーションの内容 | 文化理解 | 教科横断的な指導 | 『英語ノート』との関連 |
|----|-----------------------------|------------------------------------|---|--|---|---------------------------------------|-------------|
| | | 主な表現 | 語彙 | | | | |
| 9 | 自分の行ってみたい国を紹介しよう | I want to go to~. Because~. | China, Italy, Korea, Egypt England Brazil, 等 | 行きたい国やその理由を友達と紹介し合い、互いに理解をしようとする。 | 様々な国に興味・関心を持ち、尊重しようとする。 | 6年社会「日本とつながりの深い国々」 | 『英語ノート』2-⑥ |
| 10 | 自分の地域や日本のことを紹介しよう 「英語で能」 | Do you know~? I will show you~. | Noh play, Tea ceremony, Flower arrangement, 等 | 自国の文化について振り返り、尊重しようとする。 能をみんなで協力しながら、自信を持って演じる。 | 外国の人に自分の地域や日本のことを紹介することにより、自国の文化について理解を深めようとする。 | 総合的な学習「地域教材一能」 ICT「E-mailの使い方」 | |

参考文献

文部科学省(2008) 小学校学習指導要領
 文部科学省(2009)『英語ノート』『英語ノート指導資料』
 文部科学省報道発表(2008) 小学校英語活動実施状況調査（平成19年度）の主な結果概要
 ベネッセコーポレーション(2008) 「小学校英語・拠点校の取り組みに関する調査」. ベネッセ教育研究開発センター, 於: 上智大学: ARCLE 応用言語学シンポジウム資料
 岡秀夫, 金森強(2009) 小学校英語教育の進め方—ことばの教育として—. 成美堂
 三浦孝, 弘山貞夫, 中嶋洋一編著(2002) だから英語は教育なんだ 心を育てる英語教育のアプローチ. 研究社

坂本ひとみ(2008) 小学校英語活動における国際理解教育のカリキュラム. 東洋学園大学紀要, 13: 217-231
 吉川成司(2002) 総合的な学習の時間, 国際理解教育, 英語教育—共生としての学び—. 創価大学教育学部論集, 53: 39-51
 大津和子 溝上泰編集(2005) 国際理解 重要用語 300の基礎知識 3版刊: 30 明治図書
 町田淳子(2009) 子どもが育つ英語活動をつくるために. 新英語教育, 476: 13-14